7

壱岐市郷ノ浦町三島地区

三島まちづくり協議会

人　口	280人
世帯数	125世帯
設　立	令和元年10月

（令和３年３月末現在）

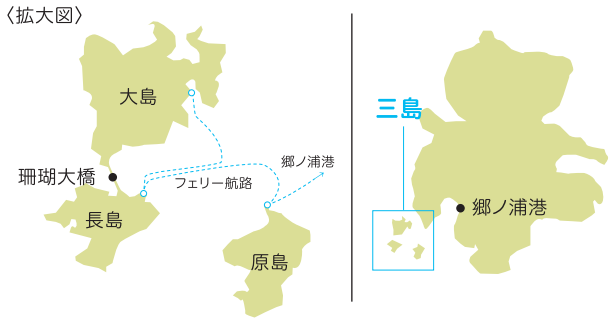
地域の現状と課題

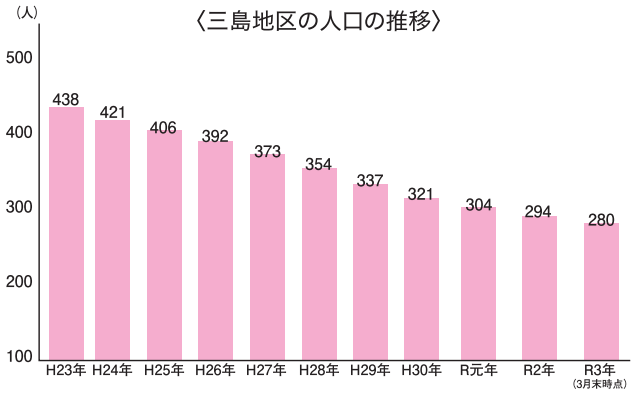
壱岐本島の南西部に位置する二次離島の大島、長島、原島をまとめて三島と呼びます。本島から約１キロ離れた大島は、白い砂浜が広がる大島海水浴場や第二次世界大戦時に造られた大島砲台跡などが観光スポットとなっています。和牛も飼育されている長島とは平成11年に全長約３００メートルの珊瑚大橋でつながりました。孤島である原島にはスイセンが自生し、冬場には「原島スイセン」として出荷されています。

漁業が主な産業ですが、近年は不漁が続いており、就業者の減少、少子高齢化が進んでいます。令和３年３月末時点で、三島全体の人口は２８０人、世帯数は１２５世帯です。高齢化率は47.5％と市平均の38.1％を上回っており、空き家も目立っています。

三島の唯一の公共交通機関は、壱岐本島と結ばれた市営の「フェリーみしま」です。大島から、長島、原島を経由し、壱岐本島の郷ノ浦港に至るルートで、１日４往復運行しており、通院、通学、通勤、買い物などに欠かせない航路となっています。

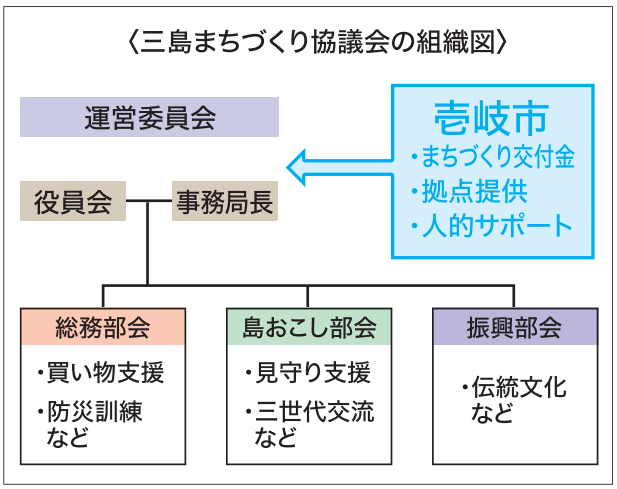
二次離島のハンディを抱える中、いかに住みよいまちづくりを続けられるか。**市は持続可能なまちづくり**のため市内18小学校区で「まちづくり協議会」の設立を進めています。その第１号として令和元年10月、三島まちづくり協議会が発足し、活動の一環として**高齢者の見守り・買い物支援**が始まりました。





観光スポットとなっている大島海水浴場

三島唯一の公共交通機関であるフェリーみしま＝大島



独居高齢者宅を回り、言葉を交わす事務局長＝令和3年8月、原島

現在の主な活動内容

〈「見守り・買い物支援」の取組〉

三島まちづくり協議会は、公民館や消防団、老人クラブ、青年会、婦人会などの各種団体で構成され、総務部会、島おこし部会、振興部会を設けています。**島民自ら地域課題を考え、協力し合いながら、まちづくりを進める**のが狙いです。各部会では、環境美化や地域の祭りの開催、防災訓練などに取り組んでおり、独居高齢者らを対象とする見守り・買い物支援については、協議会の事務局長が一人で担っています。

令和３年10月時点の支援対象は大島に10人、長島に11人、原島に６人の合わせて27人います。事務局長は、協議会事務局がある大島を拠点として、毎週月曜に大島、水曜に原島、金曜に長島で、午前中に高齢者宅を回って、会話を交わしています。壱岐本島にフェリーで通院や買い物に出ている高齢者がいると分かれば、午後に島に戻ってくる便に合わせて港に待機しておき、降りてきた高齢者を見つけて車に乗せ、自宅まで送っています。大島と長島は橋でつながっているため活動しやすいですが、原島は孤島のため、事務局長もフェリーを使わなければならず、活動はほか２島と比べると、制限を受けます。

壱岐本島では、郷ノ浦港近くにあるスーパーが協力しています。島民が事前に電話で、食料品や日用品など必要な物を注文すれば、店が商品を袋に入れてフェリー乗り場まで運びます。船員が島まで運び、島で受け取った事務局長が自宅へ届ける流れです。

〈運営上の課題と克服手法〉

三島地区にはかつて商店が三つありましたが、店主の高齢化などに伴い、ゼロとなりました。壱岐本島のスーパーの商品を積んだ車がフェリーで三島を回る「移動スーパー」も一時検討されましたが、スーパー側の経費負担が大きく、実現には至りませんでした。

事務局長は、少しでも高齢者に寄り添った活動となるよう、訪問先が留守なら訪問したことを伝えるメッセージカードを置き、体調が優れない人に備えて血圧計も持ち歩くなど工夫を重ねています。

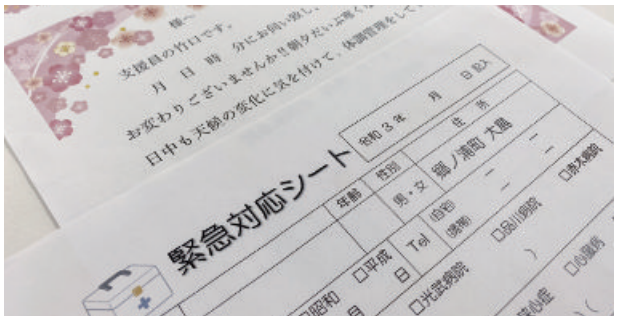
買い物支援に協力している壱岐本島のスーパー＝郷ノ浦町郷ノ浦

POINT
- 島民自ら地域課題を考え、協力しながらのまちづくり
- 独居高齢者の見守りと買い物支援を並行
- 壱岐本島のスーパーが協力

孤島の原島では活動が制限される上、活動拠点や休憩所もなかったため、市は令和3年夏に老人憩いの家の一室を拠点化しました。

事務局長はこのほか、広報誌作りや会計事務、壱岐市に提出する活動報告書作りなどを一手に担っています。事務局長がいなければ、全ての活動が事実上ストップすることになり、代わりの人材がいないことが最大の課題です。

補助員を採用することは一つの方策ですが、三島まちづくり協議会の現在の予算の枠組みでは、人件費を賄えません。市による予算の拡充、あるいは三島まちづくり協議会が新たに独自で収益を上げる取組が必要になってきます。現状の打開に向けて、市と協議会のより一層の連携が期待されます。



高齢者の見守りに生かしている緊急対応シートと訪問カード

フェリーみしまから荷物を運ぶ事務局長＝令和3年10月、大島

INTERVIEW できる限りのことをしたい

壱岐本島出身で、結婚を機に大島で暮らし始めました。三島にはかつてあった商店が今はなく、ジュースやたばこの自動販売機があるだけです。漁船を持っている人は自分で本島に行って買い物ができますが、そうじゃない人はフェリーみしまで行くしかありません。抜本的に暮らしやすくするには、本島と橋でつなぐしかないと思いますが、簡単ではありません。

見守りに回ると、高齢者が待っていてくれて、帰り際に「じゃあ、気を付けてね」と言うと、「あんたもね」と返してくれ、元気をもらいます。これからも高齢者は増えていくので、見守りや買い物支援は続けていかないといけません。

大島海水浴場などには観光客も来ますので、市役所の協力を得て、観光マップも作りたいと考えています。一人でできることに限界はありますが、できる限りのことをしていきたいと思っています。

三島まちづくり協議会
事務局長
竹口　賀代子さん

行政からの支援

壱岐市は、三島まちづくり協議会の拠点として、**大島僻地保健福祉館の一室を提供**しています。**総務省の集落支援員制度を活用**して、事務局長を採用し、その報酬や事務局の備品購入などに充てています。協議会の活動資金としては、市が「まちづくり交付金」として、人口1人当たり1000円をはじめ、買い物支援に関わる経費など合わせて年間120万円前後交付しています。

三島まちづくり協議会の事務所開所式＝令和元年10月、大島僻地保健福祉館

今後の課題・展望

三島まちづくり協議会を設立するに当たって実施した島民アンケートでは、これからも三島に住み続けたいか尋ねると、「今後も住み続けたい」が107人で最も多く、「どちらともいえない」は72人、「将来は他のまちに移りたい」は24人でした。

壱岐市は、国の「SDGs未来都市」に選ばれており、「誰一人取り残さない」という基本理念のもと、持続可能なまちづくりを推進しています。その一環として、**テクノロジーを活用して高齢者の負担を軽減**するため、島にいながら薬を入手できるように本島からドローンで薬を運ぶ実験ができないかなどについても検討していきます。

住み慣れた地域で暮らし続けたいという島民の願いを尊重するとともに、少しでも生活の不便さを改善していく取組が壱岐市と協議会には求められます。

壱岐本島の岳の辻展望デッキから望む(中央左から)原島、長島、大島

INTERVIEW

島民同士の交流を活発に

三島まちづくり協議会
会長
豊島　仁美さん

大島生まれで、現在は大島公民館長をしており、令和3年4月に三島まちづくり協議会の会長に就きました。現役時代は、現在、壱岐市営のフェリーみしまとなっている航路で、市職員として乗組員をしていました。

大島も昔は漁業の水揚げが多く、活気がありましたが、年々、状況は厳しくなっています。少子高齢化が進む中、これから三島の人口が増えることは考えにくく、まちがこのまましぼんでいくのではないかと思うこともあります。

そんな中にあっても、安全・安心で住みよい島づくりを進めていくには、島民の協力が欠かせません。三島まちづくり計画書では、**「話しあい、支えあい、笑いあい」の三つの(愛)**で、「日本一の二次離島」を目指すことを目標に掲げています。島民同士がこれまで以上に交流できるようになってほしいと願っています。

まとめ

① 島民自ら地域課題を考え、協力し合いながらのまちづくり
② 独居高齢者の見守りと買い物支援を並行
③ 壱岐本島のスーパーが協力
④ 集落支援員制度を活用
⑤「住み慣れた地域で暮らし続けたい」という願いを尊重
⑥ 独自で収益を上げる取組が必要

取材を経て

三島まちづくり協議会は人的、資金的に限られる中、できる限りのことをしています。二次離島というハンディを抱え、高齢化、人口減少を食い止めるのは容易ではありません。それでも古里に住み続けたいという島民がいます。少しでも生活の不便が緩和され、地域に活力が生まれるよう、まちづくり協議会のさらなる活発化を期待します。

島の活性化には、交流人口も必要です。大島のアワビなどの種苗生産施設「壱岐栽培センター」には島外から視察団が訪れます。これをヒントに、雇用や交流を生み出す何らかの施設を三島に整備できないか。あるいは空き家を生かしてワーケーションや移住を進められないか。官民の知恵の出しどころです。